かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第１５号（平成３１年１月）

新橋（しんばし）

覗橋（のぞきばし）

あゆむ「また、楢下に来たね。」

ミドリ「ここにはいろいろなものがあるから、いつ来ても楽しいわ。今日は、橋よね。」

あゆむ「あれ、橋は前に2つ見たんじゃなかった？」

ふみお「うん、でも、いつごろ、どのようにしてできたのかなどを、くわしく知りたいよ。」

あゆむ「ここに説明板がちゃんとあるじゃないか。“新橋は”、えーと …。」

ミドリ「新橋は、通称“めがね橋”と呼ばれて、楢下の新町から下町に通ずる間を流れる金山川に架けられたアーチ式の石橋である。昔は木橋であり、洪水のためしばしば流失したので、その都度の修理、架け替えは大変な苦労であった。」

ふみお「楢下の町ってどうなっていたんだっけ？」

文じい「図にしたものがある。」

あゆむ「新しくできた町だから新町か。」

文じい「そう。それに楢下の町は洪水の影響もあって移り住むという歴史があった。」

ミドリ「アーチ式と言えば、前に見た橋も同じね。堅盤橋も、めがね橋と呼ばれていたし。」

ふみお「それから、新橋は、明治初期に三島通庸が県令になると西洋の土木技術が導入され、石の橋が架けられるようになった。この橋がそれであり、県から三百円を下付金として補助され、残り七百円は地元が立て替えて架けている。」

ミドリ「前の橋と同じ県令の三島通庸ね。」

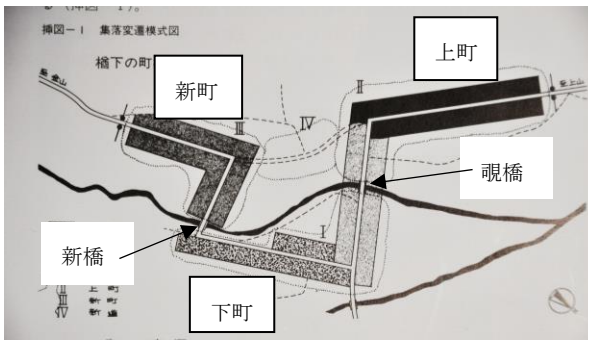
あゆむ「楢下の人たちはがんばったんだな。だいじょうぶだったのかな、お金？」

ふみお「続けて読むと、この金を通行する人・人力車・荷車などから“橋銭”として徴収したという珍しい橋でもある。」

あゆむ「へえ、通るだけでお金が取られるのか！」

文じい「ふむ。地元の人たちにとっては大変じゃったろうのう。それで長くは続かなかったようじゃが、橋銭については、実はこの橋が始まりではなく、明治6年には、行馬橋（矢来橋）でも橋銭を取り始めていたんじゃ。」

ミドリ「ふーん。さらに続けるけど、明治13年8月に竣功。橋長14.7m、全幅4.4m、アーチの高さ4.4m、河床部の径約 12m。石材は、大門石と呼ばれる凝灰岩を用いている。」



『楢下宿場町の集落形態』上山市より

ふみお「わきに石の碑があるけどなんて彫ってあるのか、字がうすくて見えなーい！」

文じい「ふむ。よく見ると。“三島通庸” とか、“三百円” 、“三石工”などの字がところどころみえるようじゃがの…。おそらく説明板にあるようなことが彫られてあると思うのじゃが、大学でも調べてくれているから、もう少しわかってくるじゃろう。」

あゆむ「さあ、今度は向こうの橋だ。」

ミドリ「覗橋ね。えーと、覗橋は上流の新橋が架橋された翌々年の、明治15年に石の橋に架け替えられた。新橋とともにいつ頃からこれらの橋があったかは定かではないが、金山峠を通る街道が楢下宿駅以前からあったとすると、かなり前から造られていたと推定できる。この橋は木橋であったため洪水により何回となく流された記録が残されており、その苦労の程をしのばせている。」

ふみお「あと、当時、村人たちは橋脚がないため不安で中々渡らなかったという話が伝えられているとあるけれど、この橋はもう慣れていたはずだから新橋のときのことだよね。」

文じい「そうだろうのう。それと、覗橋のことについての資料は少なくて、あまりよくわかっていないんじゃ。」

ふみお「それはどうしてだろうね。」

文じい「ふむ、それは、2番目の橋だったので、新橋の時と同じような取り組みまではしなかったためなのか、余計な資料は残さなかったためなのかなどと、何ともよくわからない。」

文じい「ただ、最近見た資料では、明治18年に板橋の修繕の願いを出して、明治20年に村費670円を出し石橋として新しく架け替えたというようなことが見えている。」

ミドリ「そんな大事なこと、もっと記録が残っていてもいいのにね。」

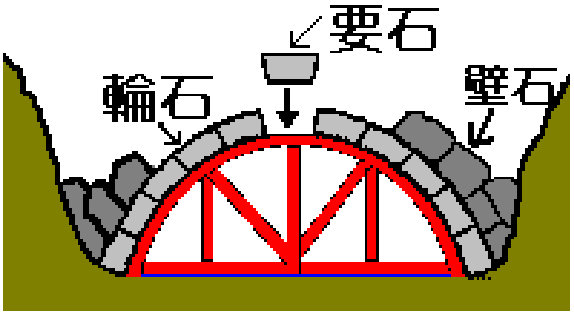
文じい「そう思うのじゃが。これからもっと資料を調べていかなければならん。」

あゆむ「ところで、こっちの橋は、新橋よりもサイズが少し小さいね。」

ミドリ「あら、渡っていると気が付かないけど、よく気が付いたわね。」

ふみお「ところで、アーチの橋はどうやって、だれが造ったのかな？」

文じい「西洋から沖縄、長崎に入り、やがてそこで技術を身につけた者が地方に呼ばれ、そして、地方でも優れた技術者が育ったということかな。図にあるような、支保工というやり方で、かまぼこ形の型枠の上に、輪石を積んでいって最後に要石をはめる。そして、壁石を積んで型枠を外すとギリギリと音をたてて収まる。その瞬間が緊張するようで、うまくいけば1～2か月でできたようじゃ。」



「アーチ式石橋の架け方」熊本国府高等学校制作の図

文じい「こちらに呼ばれた技術者は、奥野仲蔵という三島と同じ薩摩の人。山形の常盤橋などを手掛けた。楢下の橋には、山形の伊藤権兵衛や片岡孫兵衛、赤湯の吉田善之助、中山の菅野庄蔵などの石工が関わったようじゃ。古くなった欄干などをどうするかなどの心配事はあるが、上山市に4つもある橋を大切に護っていきたいものじゃ。」

（現地案内図は、第４号（楢下）をご覧下さい。）

発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）